

CRASEED NEWS



発行:NPO 法人 リハビリテーション医療推進機構 CRASEED / 年3回発行 / 第24号(2013年9月14日発行)
〒560-0054 大阪府豊中市桜の町3-11-1 関西リハビリテーション病院内 TEL 06-6857-9640 <http://craseed.sakura.ne.jp/>

no. 24

「いま、リハ医として思うこと」

—第50回リハビリテーション医学会学術集会を終えて—

2013年6月13日から3日間、第50回日本リハビリテーション医学会学術集会が開催されました。私にとって初めてのリハビリテーション医学会への参加でしたので抄録集を手に胸を躍らせながら東京へ向かいました。

今回のメインテーマは「こころと科学の調和—リハ医学が築いてきたもの」。

学会には2日目からの参加となりましたが、最初は川崎医大の平岡崇先生による「高次脳機能障害外来のあるべき姿」という講演を聴講させていただきました。講演の中で平岡先生は高次脳機能障害の診察における重要なポイントとして次のような点を挙げていらっしゃいます。①認知障害の改善、②障害の認識を高める、③代償手段の獲得、④環境調整。これら4点です。元の人生に戻れなかったとしても新しい人生を切り拓くことこそが重要なことであるという内容でした。

また、その日の午後は札幌病院リハ科・岡本五十雄先生の「障害受容と克服。脳卒中患者のこころのうち」という講演も聴講することができました。こちらの内容とし

ては一般的に障害の受容に至るまでには5期が存在し、受け止めるまでに歳月を要するという。また、発症3年を過ぎたあたりから障害を受容する割合が高くなってくるとや人生に満足度の高い人ほど障害を発症しても「それもまた人生の一部」として受け止めやすいということなど、大変興味深い内容でした。片麻痺の場合、廃用手の人ほど受け止めることが難しく、実用手の人ほど受け止めやすいという事実があり「ご自身の受容度とADLは関連している」との内容でした。そのお話を聞いた時、リハの継続は障害受容の観点からも非常に重要なことであり、自分はリハ医として「実用手とまではならなかったとしても廃用手にならないように精一杯努力している」と改めて胸に思いました。

3日目は「脳卒中片麻痺のリハビリテーション—ADL回復の一步先へ」という演題で道免先生座長の下に慶應義塾大学リハ医学教室の里宇明元先生、産業医科大学リハ医学講座・蜂須賀研二先生、当院からはリハ部・竹林崇OTを発表メンバーにそれぞれHANDS療法やBMIなどについての発表が行われ、盛会のうちに終了しました。私自身もリハ治療の進歩と当医局の先進的な治療に感激し未来への決意を再確認した次第です。

最終日の午後は日本脳性麻痺研究会・佐賀大学の松尾清美先生による講演を伺いました。重度肢体不自由児が就学前に自分の意思で移動する「楽しさ」を体験していくことがいかに重要か、などを説か

れました。大人は子供を抱えたり、バギーでの移動を介助するため子供の自立心や社会性、責任感の獲得を阻害している現状があります。そこで、もしも僅かに動かせる機能に着目し、その能力の方向性を生かすことができたなら、自らの意志で電動車いすなどを動かすことができるようになる可能性が出てきます。そこで、自立を目指すことができる車いすやkidwalkなどの紹介もなさっていました。講演の最後に松尾先生が自らの想いを述べられました。“歩けないのに「歩けるようになろうね」というのは辛い。歩けるようになって、たとえなれなかったとしても「自分で動けるようになろうね」と伝えていきたい。”大変印象深いお言葉が胸に刻み込まれ、無事に学会終了を迎えることができました。

また今回の会場でもCRASEEDのブースが設置され、和気あいあいと医局の先生同士がコミュニケーションする場となり、私自身も安心感と共に学会ではリラックスして学ぶことができました。

何より誇らしかったことは2012年度のリハ医学誌論文賞にて我がCRASEEDメンバーである細見雅史先生が最優秀論文賞に、相良亜木子先生が奨励論文賞を受賞するというWの快挙でした(写真)。本学会開会式の後には盛大に表彰式が行われ、将来は私も先輩方の輝かしい後ろ姿に続くことができたらいいな、と思いました。

改めまして、このような貴重な機会を与えていただいたことに心より感謝するとともに、今回の学びを今後の治療に生かしてまいりたいと思います。本当にありがとうございました。



CRASEED 新人紹介



西宮協立
リハビリテーション病院
川口杏夢 先生

今年度からCRASEEDに参加させていただくことになりました、川口杏夢と申します。出身は神奈川県横浜市で、私立桜蔭高校を卒業後、信州大学医学部に入学し

2002年に整形外科に入局しました。大阪へ転勤後も整形外科医として勤務しておりましたが、縁あってリハビリテーション科のポストで仕事をさせていただく機会を得まして、装具処方や他科の先生方からリハビリテーションの依頼や相談を受けていく間に、リハビリテーション医学を本格的に勉強したいという気持ちが強くなり、このたびの運びとなりました。参加をお許しいただきました道免先生始めCRASEED会員の皆様に深謝いたします。7月から西宮協立リハビリテーション病院で研修させていただいており、まだまだ慣れない仕事で諸先生方にご迷惑をおかけしながらではございますが、早速リハビリ科の仕事の面白さを日々実感しております。まだまだ未熟ではありますが、諸先生方のご指導ご鞭撻のほど、今後ともよろしくお願い申し上げます。



兵庫医科大学病院
足立清香 先生

本年4月から兵庫医科大学病院で勤務させていただいております足立清香です。今年で医師4年目になります。高校生時代にクラシックバレエで踊ることを仕事にしようかと考えていましたが、怪我が

重なり病院へ行った際に医師から「バレエをやめれば治ります」と言われ、「バレエをやめずに怪我を治せる医者はいないのか。そもそも怪我をしない方法を教えてくれる医師はいないのか」と強く感じ、いないなら自分がそんな医師になればいいと医師になることを決めました。そういったきっかけで医師を志したので、自然とリハビリに興味を持つようになりました。リハビリの世界に足を踏み入れると、QOL改善から死亡率を減らす効果が非常に大きい治療としてのリハビリまで本当に幅広く、「リハビリはプレ急性期の治療」と感じています。道免先生を始め優しく楽しい医局のみなさんと10年先・20年先を想いながらリハビリを勉強させていただき、充実した毎日を過ごさせていただいています。がんばって参りますので今後ともよろしくお願いいたします。



兵庫医科大学
ささやま医療センター
中島誠爾 先生

初めまして中島誠爾と申します。中にはご無沙汰しておりました、と挨拶すべき先生方もおられますが、再度クラシードに入会させていただきました。脳外科からリハビリ

テーション科(リハ科)に転科し、再度脳外科に戻りましたが、リハビリの重要性を再認識しリハ科に戻りました。

「ソウル・サーファー」という実際にあったサメに片腕を奪われ障害をもちながらサーフィンを続けるという映画に感銘を受けました。目標に向かい障害を克服していく過程でのリハビリの素晴らしさを痛感しリハ医であった時代を思い出しました。

転科、転科と落ち着きのない自分ですが、新人とはいえ今年後厄でもあり、そろそろ落ち着いた人物になろうと思います。今後とも、なにとぞ御教授よろしく申し上げます。

